

子規の死 その1

絶筆三句

子規が亡くなった日

病気とたたかいながら文学活動を続けた子規は、明治35年9月19日に、東京の子規庵で亡くなりました。35才(正確には34才と11か月)でした。

最後に作った俳句

右の絶筆三句は、子規が亡くなる数時間前に書いたものです。

子規は家族や仲間に助けをもらい、寝たままにこれらの俳句を書いていきました。

へちま忌

絶筆三句はどれもへちまの俳句なので、「へちま三句」と呼ばれています。

このことから、子規の命日(9月19日)を「へちま忌」と言います。

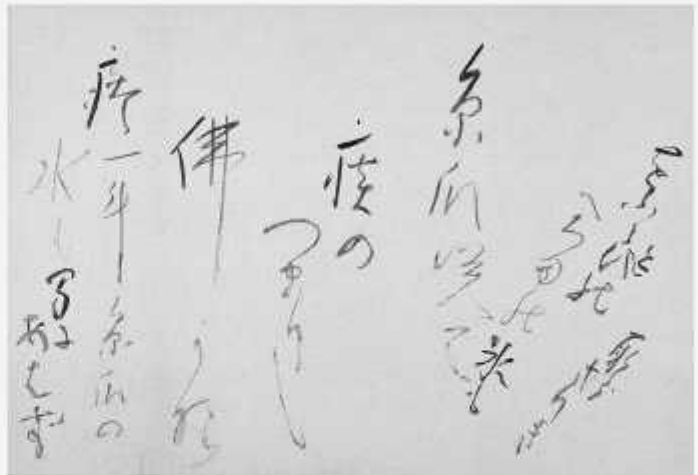
へちま水の話

昔から「陰曆8月15日の満月の夜に、へちまからとった水を飲むと痰が切れる」という言い伝えがあります。これをヒントに絶筆三句を作ったのでしょうか。

子規がこれらの俳句を書いた日の一昨日(おととい)は、ちょうど十五夜でした。



絶筆三句 (複製)



②	①	③
痰 <small>たん</small>	糸 <small>へちま</small>	を <small>を</small>
糸 <small>へちま</small> 一 <small>いつ</small> 斗 <small>と</small>	痰 <small>たん</small> 瓜 <small>うり</small>	へと
間 <small>ま</small> 瓜 <small>うり</small> 斗 <small>と</small>	仏 <small>ほとけ</small> の <small>の</small> 咲 <small>さい</small>	取 <small>と</small> ちと
に <small>に</small> の	か <small>か</small> つて	ら <small>ら</small> ま <small>ま</small> ひ <small>ひ</small>
あ <small>あ</small> 水 <small>みづ</small>	な <small>な</small> ま	ざ <small>ざ</small> の <small>の</small>
は <small>は</small> も	り	り <small>り</small> 水 <small>みづ</small>
ず	し	き <small>き</small> も

※番号は、俳句を書いた順番です。



子規の母親と妹

子規は、25才の時に、松山にいた母親・八重と妹・律を東京へ呼び、家族3人でいっしょに暮らし始めました。

八重と律は、いつも看病や仕事の手伝いをして、子規を助けてました。

子規は病気の痛みをこらえきれず、いかりやいらだちをぶつけることもありましたが、本当はいっしょうけんめい世話をしてくれる2人にとっても感謝していました。



▲母 八重



▲妹 律

子規の家・子規庵

子規は、東京に来てから何回も引っ越ししました。最後に住んだのは、上根岸という所です。27才の時に引っこして、約8年間くらしました。この家は「子規庵」と呼ばれました。

子規庵には、いろいろな人が子規を訪ねて来ました。彼らは俳句や短歌、写生文などをみんなで見せ合って、意見を言い合いました。そこには、のちに文学の世界で活躍する人がたくさんいました。夏目漱石や伊藤左千夫もその1人です。

子規庵のその後

子規庵では、子規が亡くなった後も、仲間たちが句会や歌会を行いました。この家は戦争で焼けてしまいましたが、弟子たちによって建て直され、今も大切に保存されています。

展示場でチェック! 子規庵の庭



今の子規庵の、子規の部屋から見える風景です。庭のヘチマやたくさんの草花が見えますね。子規が使っていた机もあります。

子規は、俳句や短歌を作ったり絵を描いたりする時に庭をよくながめました。

その時にも、こんなにたくさんの草花があったのでしょうか。